

[エッセイ]

「神話研」の思い出

三浦清美

はじめに

2013年3月をもって長谷見一雄先生が東京大学をご退官される。そんな知らせがメールで舞いこんできたのは、今年（2012年）の4月半ばであった。最近こそお会いする機会が少なくなったものの、長谷見先生には、公私においてたいへんお世話になり、敬愛ひとかたならぬ先生であったので、正直、この知らせには特別の感懐をいだかずにはいられなかった。そのメールで、長谷見先生の退官記念論集に何か論文をというお誘いをいただいたのだが、私自身の非力ゆえに、気の利いたテーマで論文を書くことがおぼつかない。そのかわりというのもいささか妙であるが、1995年ころから2002年3月頃まで7年の長きにわたって継続した「スラヴ神話研究会（通称、神話研）」の思い出について記し、あらためて長谷見先生の学風を思い起こし、安きに流れる自らの怠惰を戒めたいと思っている。

長谷見先生のお名前をはじめて聞いたころ

長谷見先生のお名前を最初に知ったのは、大学院の修士課程の1年生のときだったと思う。その頃、いまのスラヴ文学科はまだロシア文学科と言われていて、川端香男里先生と栗原成郎先生とがじつに理想的に役割分担をされ、学科の運営にあたっておられた。月曜の5限に「スラヴ学演習」という授業があり、勉強成果を発表する練習をしていた。

いまほどプレゼンテーションのやり方は重要視されていなかったが、自分の発表の順番を思うとなかなか責任の重い、その意味ではいささか憂鬱なところもある授業であった。とはいえ、仲間の発表を聞くのは刺激にもなり、なによりも面白かった。授業後、そのまま本郷界隈の居酒屋に立ち寄ることも珍しくなかった。川端先生と栗原先生の臨席のもとで、学科に所属する学生は、修士課程学生も博士課程学生もこの授業に出席するという建前になっていて、発表者を決めて報告が行われ、指導教官のコメントをいただいたり、ほかの学生と議論をしたりする。

初回の授業だった。その年の全体テーマはたしか「メタファーとアレゴリー」だったと記憶する。勉強の成果は最終的には修士論文としてまとめることになるが、ここに先輩た

ちの修士論文のなかで優れたものをもって来たといって、川端先生がいくつかの論文の冊子を回覧させた。その一つが長谷見先生のベールイのメタファーについての修士論文だった。川端先生は、長谷見先生の修士論文を非常に高く評価しておられた。いわく、「長谷見君は卒業論文をゴージャスのメタファーで書き、修士論文をベールイのメタファーで書いていて、ちょっとメタファーに取りつかれてしまったようなところがある。読みも鋭いし、論理も緻密である。これを読んだときには、私たちもその質の高さに驚嘆して、まさにPh.Dに匹敵すると思ったものだ。」かたわらにいらっしゃった栗原先生も深くうなずいておられる様子だった。

そのときから、川端先生が手放しで激賞する、超人的なスケールのすごい先輩という、長谷見先生についてのイメージが私のなかに深く根を下ろした。そして、そのイメージは、その後神話研で7年近くにわたり長谷見先生の指導をうけることで、深まりこそすれ、馴れる薄まるといったことはなかった。川端先生のこの話のあと、何度か学会などで人から「あの人が長谷見さんだよ」と教えられたのだが、遠くからお姿をうかがいながらも、自分から近づくような勇氣はなかった。嚔咳に接することになるのは、長谷見先生が東大に移られてからである。

神話研の立ち上げ

1993年4月、長谷見先生が、山形大学人文学部から東京大学文学部スラヴ語スラヴ文学科に着任したとき、私は大学院の博士課程を終えて、学術振興会特別研究員として同学科にお世話になっていた。ちょうど長谷見先生と入れ替わりに北海道大学文学部に転出された栗原成郎先生が私の指導教官だったので、栗原先生が私の指導を長谷見先生に託されたのだと思う。私はその頃、中世ロシアのキリスト教と異教の関係を研究していたこともあり、こんな本があるのを知っているかと長谷見先生に示されたのが、この研究会で輪読することになる『スラヴとポーランドの神話』(Aleksander Brückner, *Mitologia słowiańska i polska*, Warszawa, 1980)であった。

この本は、ポーランド語の語源辞典を著したことで知られる、ポーランドの言語学者、アレクサンデル・ブリュクネルの著書である。ブリュクネルはスラヴ神話にも一家言もっていて、19世紀から20世紀に世紀が変わるころ、汎スラヴ主義がかまびすしい時代に、この書をもってロシアのアーニチコフやチェコのニーデルレら諸国のさまざまなスラヴ文化研究者と論戦を挑んだ。論に熱が帯びるあまり、罵言めいた言葉づかひも散見される、初学者にとっては実に難解で厄介なテキストだった。

1995年の1月までは博士論文にかかっていた、4月からは電気通信大学という職場を得て新しい環境に順応しなければならなかったもので、おそらく神話研の立ち上げはそのあと

のことであると思う。それでも、1997年3月には、最初の勉強成果が「SLAVISTIKA」XII号に掲載されているから、1995年暮れから1996年年初にかけて、神話研は立ち上げられていたことになる。ロシア・フォークロアの研究からスラヴ神話に関心を抱いた熊野谷葉子さん、文学にあらわれる神話的なイメージに関心をもち三好俊介さんが設立時のメンバーだった。

神話研の中心には、つねに長谷見先生の姿があった。そのころは私もほんとうに若くて、テキストは難しければ難しいほどよいと信じこんでいた。ポーランド語が大してできないのに、わざわざ難解なテキストを選んでいるのだから、長谷見先生のポーランド語力がなければ、神話研が成り立たなかったことはまちがいが無い。私たちにとって神話研は、実質的に長谷見先生にポーランド語の稽古をつけてもらう得がたい機会だった。

神話研では、ポーランドの言語学者スタニスワフ・ウルバンチクが1980年に再刊したテキストを底本とした。先に書誌を挙げたテキストである。研究会のペースは月に一回、担当を決めて原文で2ページ分くらいの日本語訳を作り、研究会の1週間くらい前をめどに、郵送ないしはファックスで参加者に訳稿を送っておく。まだメール添付ファイルなどという「文明の利器」がなかったのだから、手間と若干の費用がかかることは免れないが、上記のような方法をとったのである。はじめは参加者も多くはなかったのだから、これで面倒なことはなかった。メール・ソフトの記録を見るかぎり、1999年終わりくらいから、連絡はメールで行うようになった。それでも、訳稿自体は確実に期して、2002年3月の研究会のお開きまで、郵便ないしはファックスでやりとりをしていたようだ。

テキストが送られたあと、各自がポーランド語と送られてきた訳稿を見比べて研究会に臨むのであるが、そのときの長谷見先生の準備が尋常なものではなかった。10種類以上のポーランド語の辞書や百科事典をとりそろえ、毎回、すこしでも疑問がわき起こった箇所を徹底的に調べられていた。

正直なところ、私たちを相手にするのだからもっと楽な準備の仕方はあったと思う。だが、長谷見先生はぜったいに(!)そのような安易な方向には流れなかった。長谷見先生は自らの能力の限界を試すように私たちの研究会の準備に臨んでおられた。そばにいる私たちはそれがはっきりと判かった。その徹底的な調べ方は、文献学の粋であり、王道だと心から思ったものだ。私などもそうしなくてはならないことは頭では分かっているが、慣れないポーランド語に手足を縛られてとても直感をレファレンス・ツールのうえで繋げていくことができない。私たちはただ長谷見先生の異能を指をくわえてみているだけであつた。

神話研の成果

このことは研究会に参加した人間が口をそろえていうのだから、私がことさらおおげさに言っているわけではない。神話研についてのエッセーを《Slavistika》に書かせてもらおうと思っているんだけど、思い出すことが何かありませんかと関係者にメールを回したところ、前述の三好さんから次のような感想が寄せられた。「神話研、懐かしいですよ～。あの精密な読解訓練の迫力は、すごかったですよね。いまでも役に立っております。」三好さんは19-20世紀のロシア詩のきめの細かい読みこみが本領なのだが、ポーランド語もその精密な読解力を長谷見先生から高く評価されていた。

あとからメンバーに加わり（1999年くらい？）、有力参加者となった小椋さんは、その後、ポーランドのワルシャワ大学に日本語教師として赴任し、ポーランド語の力を伸ばして、オルガ・トカルチュクの『昼の家、夜の家』（2010年刊、白水社）を翻訳した。この本は好評を博して、刷を重ねた。また、ごく最近、2012年のことであるが、小椋さんは、論文『絵を描く作家』、アレクセイ・レーミゾフで日本ロシア文学会の学会賞をとった。このような素晴らしい成果の根底には、神話研での徹底した読みのトレーニングがあったのではないかと思う。

さきにも少しのべたが、訳読会の成果の一部は、1996年から2001年にかけて、東京大学スラヴ語スラヴ文学科年報《SLAVISTIKA》XII-XVI/XVIIに掲載された。その著者名を見ると、96年号から98年号までが長谷見先生と三好さん、熊野谷さん、三浦が著者となっていて、99年から寒河江光徳さんが加わり、2000/01年号でさらに小椋彩さん、柿沼伸明さん、鳥山祐介さんが参入している。

これは活字のうえの話で、だいたい1から2年くらいのタイムラグがあるようだ。たとえば、98年号になかった寒河江さんの名前が99年号にあるということは、98年暮れか99年のわりと早い時期に寒河江さんが訳読会のメンバーに加わったということの意味する。だから、比較的あとになって、つまり、2000年くらいにメンバーに加わった久野康彦さん、坂上陽子さんの名前が、残念ながら、《SLAVISTIKA》掲載の印刷物のうえにはないのである。¹

《SLAVISTIKA》に掲載されたのは、原書 pp. 5-28 のスタニスワフ・ウルバンチクの解説論文「アレクサンデル・ブリュクネルとその神話学の業績」（《SLAVISTIKA》XII）、原書 pp. 65-83 の第1章「スラヴ神話研究」（《SLAVISTIKA》XIII）、原書 pp. 83-99 の第2章「史料」（《SLAVISTIKA》XIV）、原書 pp. 99-113 の第3章「ペルーン」（《SLAVISTIKA》XV）、原書 pp. 114-139 の第4章「スヴァローグ＝ダージボグ」（《SLAVISTIKA》XVI/XVII）である。

ブリュクネルのテキストに入ると、私たちは「付記」と称してブリュクネルとその著作

¹ できるだけ関係者に聞いて回って万全を期したつもりではいるが、もしも参加したのに名前が挙がっていないという方がおられたら、どうかご海容ください。すみません。

について、簡単な感想を添えることとした。第1章「スラヴ神話研究」では三浦が、第2章「史料」では三好さんが、第3章「ペルーン」では熊野谷さんが、第4章「スヴァローグ＝ダージボグ」では寒河江さんが、短い文章ではあるが、それぞれの関心に引き寄せてブリュクネルをどう読んだかを披露している。

私たちは、2002年3月までに、第5章「ヴォロス＝ヴェレス」、第6章「ルーシの小さい神々」、第7章「悪霊の領域」、第8章「儀礼的要素」、第9章「西スラヴ人-宗教史概説」、第10章「異教とキリスト教」を訳読会で読んではいるが、その成果は《SLAVISTIKA》誌上ではまとめられていない。ひとえに筆者の怠慢のためである。

神話研の雰囲気

長谷見先生は万事をゆるがせにはしないから、神話研の雰囲気はたいへん引き締まったものだった。ちょっとでも手を抜いた予習をすると、たちまち見抜かれて長谷見先生のご機嫌を損じることになる。たびたびあったわけではないが、まったくなかったわけでもなかった。そんなときは、長谷見先生のご機嫌を損ずるのが怖いというよりも、恥ずかしいのである。長谷見先生はそれに倍する準備をして研究会に臨まれていたことがわかっていただけだ。そういうわけで、私たちは必死で予習に取り組んだ。

しかしながら、神話研の雰囲気は堅苦しさ一辺倒のものではなく、もっとずっと風通しのよいものだった。神話研の雰囲気は、《SLAVISTIKA》XV（99年号）の熊野谷さんの付記を読むとよくわかる。三好さんが九州大学助手として、3年間福岡に赴任されたころのことだ。

「我が神話研究会は、月に1,2回というペースながら地道な活動を続けている。三好氏は学窓を出て九州へ赴任した²ため毎回の集まりには参加できなくなったが、会としては彼の上京時には日程を合わせ、訳の分担をしてもらうなど、戦線離脱されないよう努力をしているつもりである。また、ポーランド語熟が高まってきたのか、それとも神話が時代の注目を集めているのか(?)、研究会のメンバーが格段に増えた。みなで頭を悩ませつつ、各種の辞書事典と首っ引きで、この後もスヴァローグ、ヴェレスと大物がつづく予定である。次号をお楽しみに。」

厳しい修練の場である一方で、神話研には和気藹々とした雰囲気があった。熊野谷さんが生まれて間もない長女の樹(いつき)ちゃんをベビーカーに乗せて研究会に参加することもあった。研究会は1時間半から2時間続くが、そのあいだ赤ちゃんはおとなしくすやすや眠っていた。研究会の暖かい雰囲気が赤ちゃんを安心させたからではないかとも思っ

² 1998年10月のことである。

ている。その娘さんも今年高校受験だそうである。

だいたい研究会のあとは、長谷見先生を本郷界隈の居酒屋に連れ出してあれやこれやの話に興じるのが常だったように思う。何の話をしたのかはもう思い出せない。毎回毎回、長谷見先生はいやな顔一つせずにお付き合いくださった。本郷の学生会館の庭が夏季にはビアガーデンとして開放されていて、よく行った覚えがある。

夏休み前と春に学期が終わったあとは大宴会だった。いつのことかは思い出せないが、浅草に繰り出したことがある。参加者は7、8人いたような気がする。池之端門から不忍池のほとりを伝って上野に出て、そのころまだあった2階建てバスに乗りこんで、浅草に行く。あたりがまだ明るかったように記憶しているので、夏のことだったと思う。まだ明るいうちに神谷パーに入って、電気ブランを2、3杯呑むといい気分になってくる。それでは、隅田川の船に乗ろうという話になって、水上バスに乗って竹芝栈橋までいき、浜松町あたりでまたどこかの店を探して飲みなおした。

今思えば、90年代の大学はまだのんびりとしていて、古きよき時代の雰囲気が漂っていた。

1999年の山形合宿

山形は99年の合宿が初めてではない。大学院時代からずっと親しくしていた仲間がいた関係で、私は山形に何度か足を運んでいる。仲間とは、私が修士時代に露文の助手で、あれこれとお世話になっていた相沢直樹さんと、長谷見先生が東大に移ったあと入れ替わりに山形大学に赴任した中村唯史さんである。

学振の特別研究員であった94年には、長谷見先生と奥様、晶子先生に誘われて、いま稚内にいる岩本和久さんとともに4人で山形のひなびた温泉宿に投宿した。生い茂る青い草に隠されるように近くに清流が流れていた。足は奥様が運転される乗用車であった。奥様は山形大学の先生で地震学が専門であり、その車を使って山奥の地震計の設置してある場所に通われるということであった。温泉の名前は覚えていない。学部生時代、私はわりと本格的に山登りをやっていたのだが、コンパスと地図を片手に藪こぎでのぼった石見堂(いわみどう)、赤見堂(あかみどう)という山が近くにあったことだけははっきりと覚えている。

長谷見先生は、岩本さんのことを非常にかわいがっておられたのだが、岩本さんはこのときに奥様から、「文学部の学生というから青白い、ひよろひよろとした文学青年が来るかと思ったら、屈強そうな若者が2人来たので驚いた」と言われたそう。このことがよほど印象が強かったと見えて、いまでも語り草にしている。私のほうはすっかり忘れていた。ちなみに、岩本さんはスキーの指導員の資格をもっている。

山形合宿の発案が誰のものかは覚えていないのだが、だいたいこうした「遊び系」のことを思いつき、実行に移してしまうのは私しかいないので、おそらく私が言いだしっぺだったのだろう。1999年の3月だった。参加者は、神話研メンバーのほかに、山形大学の相沢さん、中村さん、岩本さんが加わってくれた。小椋さんもアレンジで大活躍だった。たしか中村さんに頼んで山形大学の宿泊施設をとってもらったと記憶している。大学の施設を使っている以上、勉強も少しはしたように思うが、はっきりとした記憶は残っていない。おおかた頭のなかは、山形のおいしい肴とうまい酒、温泉、スキーに占領されていたのであろう。

山形合宿では、在山形の相沢さんと中村さんにはずいぶんお世話になった。神話研の懇親会にも合流してくれた。奥さまも来てくださったと思う。みんな山形をさすがによく知っていて、民芸風の渋い居酒屋で山形の地酒を飲ませてくれた。車を出して温泉につれていってもらったり、蔵王にスキーに行ったりした。考えると、短い合宿だったわりに盛りだくさんのメニューで、もしかしたら2泊したのかもしれない。連れて行って下さった方には申し訳ないのだが、地酒の名前も、温泉の名前も忘れてる。

覚えているのは、次年子（「じねご」と読むらしい）に名物のそばを食べに行ったことだ。次年子は、山形市の北西40キロ、最上川の舟町であった大石田からさらに5キロ山間に入ったところにある集落で、そばがうまい。あまりに山深くて、冬は雪に閉ざされ、冬に生まれた子供は、次の年に雪が解けないと役場に出生届が届けられないので、次年子という名前がついたそうだ。店は昔ながらの大きな民家を、ほとんど手を入れずに使っていた。

濃いだし汁を、大根をおろして漉した白濁した汁で割る。おばさんたちが隣室で打ったすぐを茹で上げたそばを、その大根汁に浸して食べるのである。つけ汁が大根なので、腹にもたれずにいくらでも食べられる。そばが出てくるのを待つあいだにだされる茄子の漬物もおいしかった（大石田は漬物がおいしいことでも有名）。この茄子の漬物はたっぷり練りがらしをつけて食す。するどい辛味がつんと鼻に抜けて、辛い物好きにはたまらない。

山形大学の宿舎だったので、朝食がつかなかった。こんなふうに一日一晩、目いっぱい遊んだあとで、朝食は大学近くの長谷見先生行きつけの喫茶店で食べたように記憶している。しゃれた店だった。こんな風に思い出していくときりがない。この山形合宿を一言で言えば、熊野谷さんがメールで書き送ってくれた次の言葉に尽きる。いわく、「山形合宿なつかしい！ 次年子のそばがおいしかった！ ケーキがすごくおいしいのに安かった！ 奥さまがやさしかった！ などいろいろ思い出します。相沢さんが車であちこち連れて行ってくださいましたね。」

神話研の休会とお祝い事

2002年2月に三好さんがペテルブルグの領事館に3年間の任期で専門調査員として派遣されることになった。三好さんは領事館で大活躍するのだが、赴任当時にやりとりしたメールが残っている。

2002年2月25日午前1時10分の三好さんからのメール。

「ご無沙汰しております。三好です。ピーテルでのメールが開通しましたのでお知らせします。これはテストメールですので、確認メールをご返信いただければ幸いです。そろそろ着任一ヶ月になりますが、まだ住居が決まらず、冬のネフスキー大通りをさまよっています...というのは冗談で、仮のペンションに住まわされています。エルミターージュのすぐ近くです。ただし家賃が高いのでそろそろ出ないと破産します。

神話研はそろそろラストスパートといったところでしょうか。「草創期」のメンバーの一人でありながら最後に立ち会えないのはまことに残念ですが、みなさまのますますのご健勝、ご発展を極北の地よりお祈りしております。」

同日11時13分の三浦の返信メール。

「ピーテルに到着された様子、まずはよかったですね。次は住居探しですね。ペトログラツキ島なんて、便利そうですね。

神話研のほうは次回で無事終了ということになります。私の記憶によれば、7年間続いた息の長い研究会でした。ブリュクネルを一通り読み終えても、このような研究会は続けたいのですが、本務のほうが忙しくなりつつあり、時間的に苦しいのではないかと思います。」

このメールから、2002年3月にブリュクネルの「スラヴ神話」を読了し、研究会は終わったことがわかる。30代の後半になって私は公私ともに生活がそれまでになく忙しくなっていた。と書くとなにか大物ぶっているようだが、要するに人生で要領の悪いつまりきが重なったのである。読書会も切りのよいところにさしかかったので、誰からともなくこれでいったんお休みということになった。読解の成就を記念してなにか打ち上げのようなものをやった記憶が、不思議にない。次の記憶は、三好さんがペテルブルグでの専門調査員生活を終えて東京に帰ってきたときである。

2005年の5月だった。それは神話研の同窓会であると同時に、創立時からのメンバーである三好さんとフィアンセの竹内恵子さんとの結婚をお祝いする集まりでもあった。三好さんと竹内さんは東大の大学院で一緒だった。神話研の在京メンバーがみんな集まった。場所は、根津の「大八」という居酒屋だった。こんなかわいらしいフィアンセをどこに隠していたのだ！？という疑問は誰もが抱いていたはずだが、しつこく追求することはあまりなかったように思う。とはいえ、久しぶりにみな顔が顔を合わせて異様に盛り上がり、

気がつくとも午後 11 時をすぎていた。私は終電に乗り遅れ、深夜バスで帰った。

これが神話研の「近況」である。あれから、もう 7 年が経つ。こうして書いていると、神話研のことは、思い出しはじめるとキリがない。紙幅がいくらあっても足りないほど、長谷見先生にはお世話になったということである。あらためて心より感謝申し上げます。また、山形で神話研の同窓会をやりたいです。

以上に述べた事柄が、私たちの「神話研」の歴史である。長谷見先生の寛大なお心のおかげをもって、東大のスラヴ語スラヴ文学研究室の一角をお借りし、真剣な文献学の追究が行われたことの証としてこれを書き記す。

2012 年 10 月吉日